

2010 年度若手の会 開催後記

2010 年度若手の会が 8 月 25 日に研究所 2 階会議室において開催された。

本年度はアルツハイマー病研究部が本会の運営を担当した。

大島総長の開会の挨拶の後、スライド発表ならびにポスター発表・討論を行った。演題数は 21 題でほぼ例年通りであった。今年度は、若手研究者が研究内容を決められた時間内で要領良く発表することができるように、スライド発表時間を従来より長く（7 分）割り当てたプログラム構成にした。時間的制約から、質疑応答は午後のポスター発表時にまとめて行った。発表内容は、昨年同様それぞれの専門領域から多岐に亘るものとなり、それぞれの研究分野における研究の進捗状況を良く反映した。ポスター発表終了後に投票を行い、最優秀賞、優秀賞を決定した。鈴木所長から表彰ならびに総括があり、柳澤副所長による閉会の挨拶があった。最優秀賞は例年実験系の研究課題が受賞していたが、本年度は認知症先進医療開発センター脳機能画像診断開発部の加藤公子氏が受賞した。実験系・非実験系を越えて高い評価を得たことに意義があるように思われた。今回受賞した脳機能画像などヒトを直接研究対象とする研究では、個人や社会への成果還元に直結することが可能であり、今後の研究の進捗に期待したい。

運営を担当して感じたこと 2 点を記したい。1 つは、勤務時間を考慮して開催時間を短くしなければならなかった点である。もう少し余裕のある時間配分ができれば良かったかもしれない。しかしながら、各研究部・室の垣根を越えた研究所全体の交流の場・機会が少ない現状を考えると、研究者間の交流、研究内容の相互理解などの点で毎年行われる本会の意義は大きい。毎日のように顔を合わせていても、研究の具体的な話をするとはほとんどないからである。私自身もこの会での発表・討論を通して共同研究あるいは研究協力に繋がった案件がでてきており、本会の意義を実感した。若手の会の充実を図る意味では、今後は場所を変えて行うリトリートのような形式も検討する必要があるかもしれない。もう 1 つは残念に思うこと。制度上仕方がないかもしれないが、若手研究者の多くは成果が形になる頃（着任後 3 年前後）に他施設へ移動することが多いため、優れた研究成果を出しても本会で発表する機会を持ってない場合が少なからずあるのではないだろうか。

(文責：アルツハイマー病研究部部長 道川 誠)